



The Interaction between Gaya and Wa:  
the Pottery and Settlements in the Early and Middle Kofun Period

## 武末純一

はじめに

①前史

②古墳時代前期

③古墳時代中期

### 【本文要旨】

本稿では加耶と倭の交流を、日本列島で出た古墳時代前・中期（3世紀後半～5世紀）の土器と集落の様相から述べた。それは、地域間の交流やその歴史的状況、あるいは渡来人集団の様相を土器がもっともよく示すとともに、集落出土の遺構と遺物からも接近すべきだと考えるからである。

まず、前史である弥生時代の事例から、いくつかのモデルと、古墳時代の資料を検討するための基盤を得た。弥生時代前期末～中期前半には朝鮮半島南部後期無文土器人が一時的に居住した諸岡型と、擬無文土器を多く含み、後期無文土器人が長期居住して地域社会に深く入り込みながら同化していく土生型の遺跡がある。中期後半以後の楽浪土器では対外交渉の結果とみられる対馬型やカラカミ型のほかに、楽浪漢人の渡来を暗示する三雲番上型が注目される。

楽浪・三韓系土器や鉄器の様相からすると、弥生後期には西日本各地の地域政権と三韓や楽浪・帶方郡との関係が強くなっていた。

古墳時代前期の加耶と倭の交流を考える際の一つの定点は、福岡市西新町遺跡である。ここでは、西側に在来の中央炉の住居、東側に外来の竈付住居、中間には両者の折衷である偏在炉が分布する。加耶系や百濟（馬韓）系の人々は北部九州や近畿・山陰系の人々と混住しつつ東側の東半と西半に住みわけており、ここは「加耶の鉄」をその目的の一つとする国際交流港であった。また、この時期の中国・四国地域や近畿地域の朝鮮系土器などは、百濟（馬韓）・加耶から近畿まで、交易・交渉の回路が細いながらもしっかりとつながったことを示す。

中期には日本の各地域で加耶の人々を主体とする渡来人が定着し、須恵器の生産技術、あたらしい農業・土木技術や鍛冶技術、馬の飼養技術などの導入に大きく貢献するが、その様相の把握には、集落出土軟質土器の分析が不可欠であった。日本における加耶系渡来人系首長の候補には兵庫県宮山古墳などがあるが、近畿地域の現状ではまだ移住した金官加耶の首長層と確定できるほどの首長墳はない。